報告講演「親たちの子どもへの思いと、それがもたらす現実」

片岡　佳美

○片岡佳美（島根大学法文学部教授）

よろしくお願いします。御紹介いただきましたように、私は京都出身で、島根大学に就職が決まりまして、それで島根に来たという、言ってみれば、Ｉターンの者です。来てからもう 20 年ぐらいが経っていて、私が高校生のときには、まさか自分が島根に来る、島根でこんなに長いこと住むとは想像もしていませんでした。それが、島根で子どもを産み育てているっていうことですし、また、昨年度は、市役所の新庁舎問題で市民運動も積極的にやっていくほど、すっかり松江人、島根人になっているっていうのは、自分でも本当に驚いております。そういう私のようなＩターンの、そういう立場から、非常に興味深く見えた、島根の若い人たちの移住の問題、流出の問題についてお話をさせていただきます。

私の報告では、「親」にスポットを当てて若年層人口流出問題を考えてみたいと思います。島根大学名誉教授の廣嶋清志先生によれば、家族は、地域人口をつくり出す主体だとのことです。なるほど、今私たちが議論している島根県の若年層人口の流出は、若者たちの親が日々かれらにどんな価値を伝えながら子育てをしているかということに強く関係していると思われます。

例えば、親が家の存続とか後継ぎとかを非常に重視していれば、そういった価値意識の下で子育てがなされていくので、子どもにもそれが伝わって、子どもが地元に残ることを考えるようになったり、実際にそうなったりすることも考えられます。逆に、親が都会での立身出世に価値を見いだしていて、それを重視しながら子育てすると、子どもも都会に出ていくことを考えるようになる。こうしたことは予想がつくことなのですが、実際に今日、地方で親がどんな価値に基づいて、どんな価値を子どもに伝えているのか、そしてそれが地域の人口にどう影響してくるのかといったことを具体的に詳しく調べたような調査研究は意外と少ないのです。

そこで、私たちは島根で子どもを育てている親たちに調査を行いました。県立高校の在学生、あるいは、ちょうど卒業したばかりの子どもを持つ親を対象にインタビュー調査を、そして松江市内の３つの県立高校で生徒とその保護者を対象にアンケート調査を実施しました。いずれの調査も、大学進学に力を入れている高校に通っている高校生やその親を対象にしているのが特徴です。

私は今年度、島根県の中山間地域で暮らす高校生の調査を行なっているところでして、彼らの多くは高校を卒業後、地元での就職とか、あるいは近隣の町の専門学校に行って、そこで勉強して、また地元に戻って就職するということを考えていて、そのインタビュー調査からは、彼らの親たちは、今から報告する親たちとはまた違った価値観を持って子育てをしていることがうかがえました。今日はその話はちょっと置いておきまして、ここでは大学進学に関心の高い親たちの場合ということでお話しさせていただきます。

「子どもには広い世界を学んでほしい」

インタビュー調査では、どの親も、子どもには広い世界を知ってほしい、広い世界を学んでほしいということを言われました。親たちは子どもが小さい頃からいろんな世界を見せてあげようと一生懸命でした。ここに挙がっている、例えばＢさんは、子どもが小学生の頃、外国から来た子どものホストファミリーになってわが子に異文化交流を体験させたりしてきたという父親です。Ｂさんいわく、「刺激を与えているんです。常に与えてきたんです。いや、結局、多分僕も、田舎にいるとそういう刺激がないから、与えないといけないっていう意識はあって、そういう育て方をしたのかもしれないですね」。とにかく、島根では刺激がないから、親がいろんなことを積極的に取り込んで、子どもに経験させてやらねばと、いろいろやってきたということです。

もう一人、Ａさんは、幼児期の息子に漢字の学習をさせたり、そして、小学生で高校生向けの教材を取り組ませたりなど、いわゆる幼児教育、早期学習に力を入れておられた母親です。子どもが高校生になったら、今度はアメリカに短期留学をさせるなど、とても教育熱心でした。Ａさんがおっしゃるには、「お金は子どもにはなかなか残してやれないけれど、でも、学力と自学自習力は身につけさせておく、これが親の務めだ、うちの方針だ」とのことでした。

そして、Ｃさん。この方は子どもが小さい頃から、様々な習い事をさせてきたという母親です。テニス、書道、ピアノ、それから社交ダンス。Ｃさんは、「押しつけかもしれない」と葛藤も感じていたとのことでしたが、そのお子さんがどれも器用に上手にこなすからうれしくなって、それが家族生活を充実させていたと語っていました。

一方、Ｆさんのお子さんは、小・中学校のときに学校にうまく適応できなくて、学校の教室で学ぶことができませんでした。それでもＦさんは、子どもには大学に行かせてやりたいという思いを強く持っていました。それで、お金はかかっても個別指導を受けさせ、通信制の高校で高校卒業の資格を取って大学にチャレンジさせることを考えていました。

このように、いずれの親も子どものために学びの機会をつくろうと一生懸命なのですね。

そういう親たちにおいては、県外の大学に進学するのは当然の流れとして認識されていることもうかがえました。ここにも挙げていますＤさんは、「父親としては１回県外に出したいと思います。お金がないから県外の大学は諦めてくれとかそういうのはできないということですね。私も５人兄弟で２番目ですけれども、私の親は上からみんな送り出してくれて」と語っていました。子どもにとって広い世界を学ぶことは大事なことであり、したがって県外進学も当然であり、そのために親はお金も労力も惜しんではならないということなのです。

子どもにいろんな習い事をさせてきたというＣさんも、そういう考えでした。ところが、お子さんが高校２年生になって突然、島根大学を受験したいと言い出したため、Ｃさんも、そしてその夫も非常に戸惑っていました。Ｃさんはこう言います、「うちの子なんか見てると、県外に行けばいいのにって私なんかは思うし、こんなとこもあるよ、こんなとこもあるよって言うけど、もう何か本人はまだそういうことを受け入れる態勢にない。ああ、高校を卒業していろいろ体験していろんな人に出会って、なぜか県外進学に向かう車から降りて考えて、うちの子はこういうこと、つまり、地元に残ることを話すんだな」。県外進学が当然と思っているので、子どもが県外進学しないと言い出したら、親はそれをすんなり受け入れられないのです。もっといろんな世界を知ってほしいのに、となるのです。

一方、幼児教育に熱心だったＡさんのお子さんは、高校２年生になって県外の有名大学を目指すと言っています。そのことについて、Ａさんは、「どうしてあんなに上手に育ったんだろうかって、おじいちゃん、おばあちゃん言っちょる」とうれしそうに言いました。つまり、県外の大学を目指すっていうことは、「上手に育った」ことを示すものと考えられているわけですね。

Ｅさんの語りにもそうしたことがうかがえます。Ｅさんは、上のお子さんは県外の国立大学に進学されたのですが、下のお子さんは県外大学を目指さず勉強もしない、部活ばっかりやっているという話をするなかで、「下の子は子育てが成功してないと思います」と言いました。子どもが県外進学を選び、それに向かって進んでいけば子育ては成功、子どもが県外進学に向けて頑張らなければ、子育ては成功してないと言われるのですね。ただ、親ですから「失敗だった」とは言いませんけれども。Ｅさんの場合,「ちょっと下の子は変わってるなと思ってて」と、もっともな理由があるように述べられました。失敗とは言いませんけれど、成功でない、うまくいっていないと言うのです。

子どもに広い世界を学ばせたい、それをするのが親の務めというのは、もちろん親なら誰もが思ってることだと思います。かわいい子には旅をさせたい。あるいは、井の中の蛙はよくない。これは地方に限らず、都会の親だってそうだと思います。けれども、調査対象であ

る親たちが重視する広い世界の学びは県外進学につながっている。そこが島根という地方の特徴だと思います。都会では広い世界の学びを強調しても、それが地元から出ていく、県外進学とかいう話にはつながってこないのに、島根だったら、そこがすっとつながっていく、そういうところが特徴的だと思います。

「広い世界の学び」とは県外進学のこと

では、どうやってつながるのか。実は、広い世界を学ばせたいと親たちがやっていることは、先ほど見たように、異文化交流とかピアノとか、それから書道といった習い事、早期教育、そういったように、要するに、学校でよいとされていること、学校で評価されるようなこと、もっと言えば受験競争で価値が置かれていることなのですね。学校での成績や評価につながっているようなものを小さいうちから、「広い世界の学びを」と言いながら教えてきているということなのですね。最近だったら、プログラミングとか英会話とか、そういったものも含まれてくるかと思います。ここで田植えとか家業のいろんなこととかの伝授とか、そういったことは登場してこないのです。

要するに、広い世界といっても、ある一定の方向性を向いているのです。学校で評価されるようなことを達成し積んでいけば、成績も評価され上がっていき、その結果、いい大学にも行ける。いい大学というのは、ここでは単純に田舎ではないということです。田舎は狭いから駄目なのです。勉強して頑張って学校で評価されて、よい大学、要するに、都会の大学に行くという、そういうシナリオがあって、それに沿っていないといけない。親の広い世界を学ばせるという子育て実践とは、学校での成功、そして、その延長線上に都会の大学への進学というのがつながっているのです。

松江の３つの高校で行なったアンケート調査の結果でもそういったことがうかがえます。こちらは親の回答を見たものですけれども、様々な価値や文化に接し視野を広げること、まさに広い世界を学ばせることを重視しているのか、重視していないのか尋ねた結果です。棒グラフの男子、女子というのは高校生の子どもの性別です。グラフに見るように、子どもの性別に関係なく、親たちは、視野を広げること、広い世界の学びっていうものを非常に重要視していることがうかがえます（図 11）。

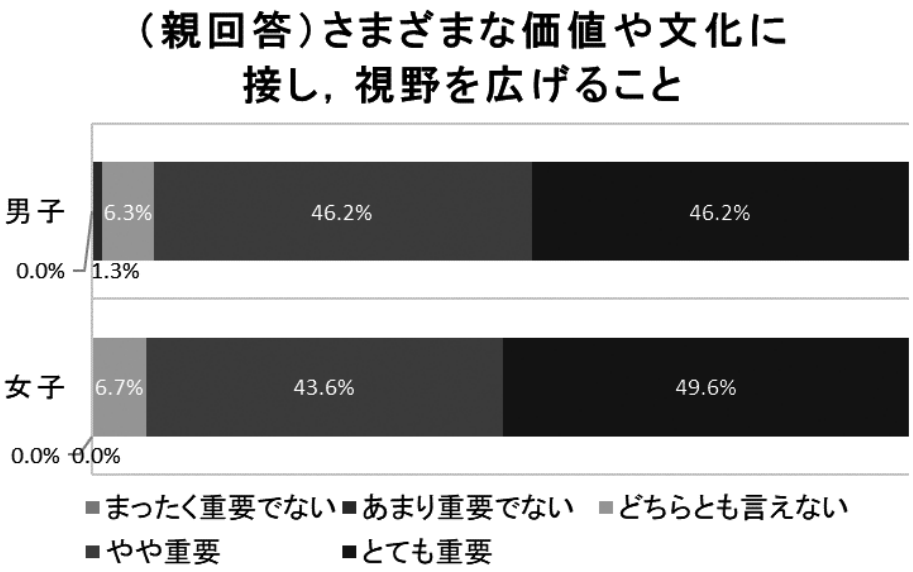

図 11

今度は、親に、地元定住にこだわらず、もっと広い世界に出て頑張ることを重視するか尋ねた結果を見ていただきます。「どちらとも言えない」がちょっと多くなるんですけれども、それでも、「重要でない」という回答の割合に比べて、「重要」という回答が圧倒的に多いということが分かります（図 12）。

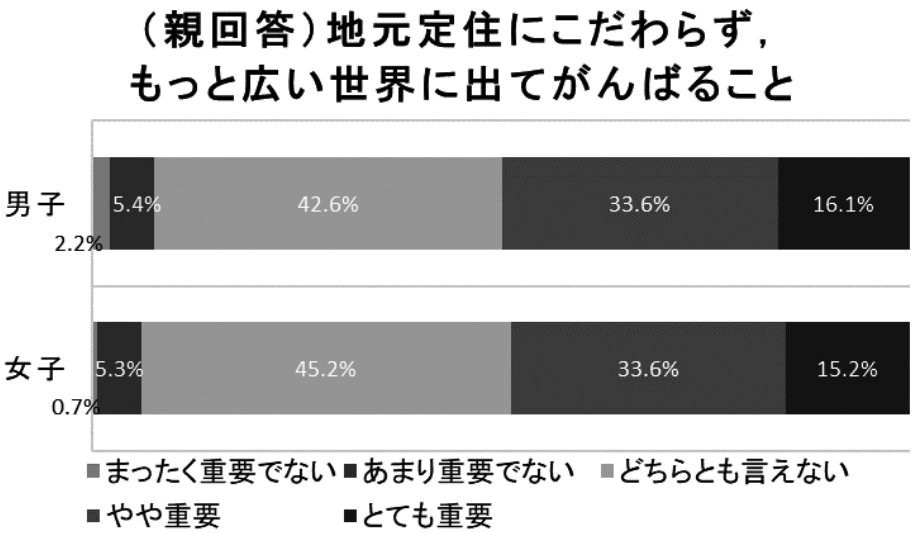

図 12

次に、高校生に聞いた結果を見てみます。大学には絶対に進学したい、そう思うか、そう思わないかっていうのを聞いているんですが、これは、進学に力を入れている高校に通ってる高校生ですので当然の結果ですけれども、性別に関係なく、9割が大学進学を目指しているということです。その高校生に、自分の人生の可能性を広げるために一度は都会に暮らしたほうがいい。これについて、そう思うか、そう思わないか聞いてみたところ、やはり子ども自身も、性別に関係なく「そう思う」「ややそう思う」が半数以上の回答になってくるわけですね。広い世界を知るために都会へ出るのを子ども自身も当然と思っている。親の価値がちゃんと伝わっていることがうかがえます（図13）。

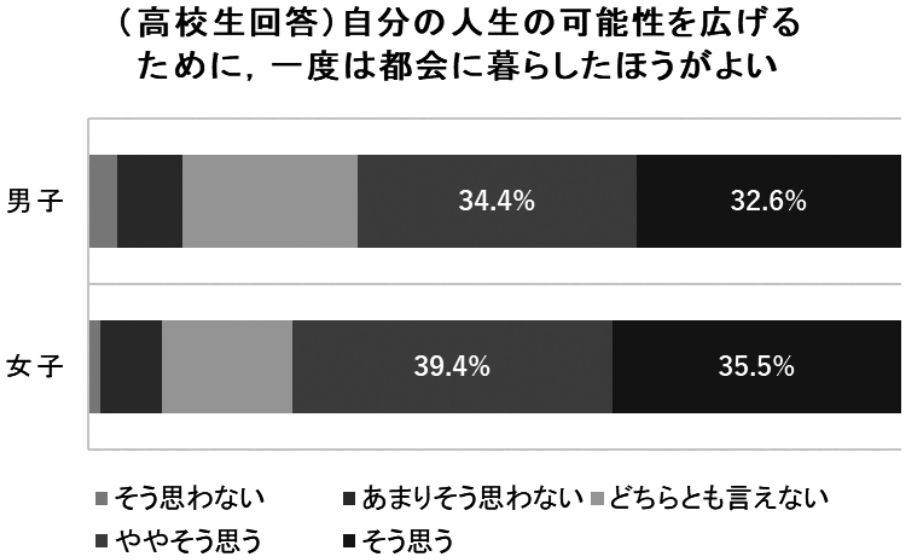

図13

高校生に、高校を卒業後も今住んでいる地域に残りたいか、そう思うか、そう思わないか尋ねた結果では、若干意見が分かれるのですけれども、それでも、「そう思わない」「あまりそう思わない」と、残りたいと思わない派の割合が男女とも多くなっています（図14）。

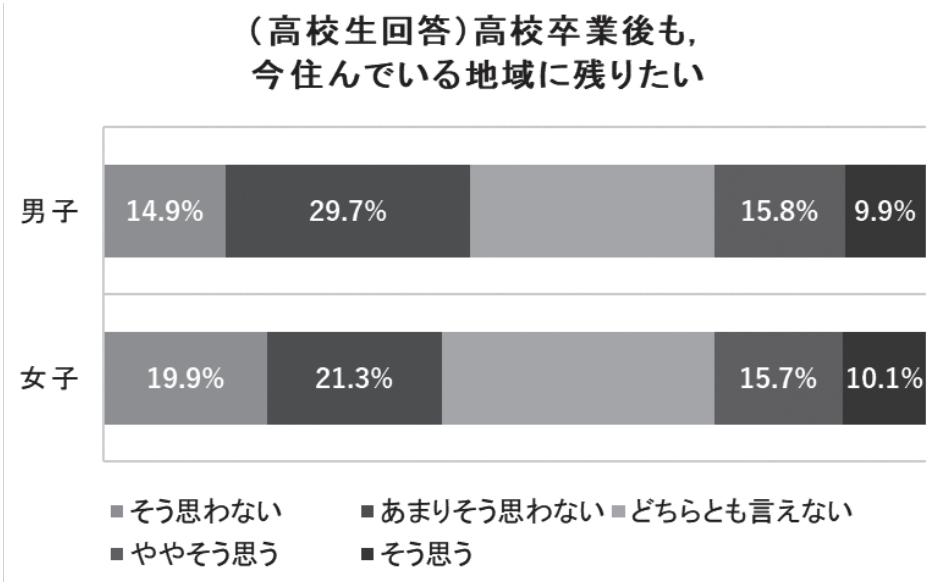

図 14

県外進学するまでに比べ、進学後のシナリオは具体的でない

問題は、都会の大学に子どもが行って、その大学を卒業した後です。進学や就職で一度は県外に出ても、いずれはふるさとに戻ってくる、このことについて親に重要と思うか尋ねたところ、最も多いのが「どちらとも言えない」です。「重要でない」と答えている親も相当数います。親たちは、子どもが大学に行くまでは、県外県外って必死に言うのですけれども、子どもが県外に出てしまうと、その後についてはあまり「こうすべきだ」というのがなく、何も言わなくなってしまうということでしょうか。そのまま放っておくというか、後は知らないというか…。戻るのは重要でないというふうに答える親もいるし、そして、または、どちらとも言えない、どちらでもいい、どうでもいい、そういう感じですね。それまでは親はとても明確に、県外県外と、方針を打ち出して子どもに接しているわけですが、もう出てしまうと、その後はそういう積極的な働きかけが見られないというのが興味深いところです（図 15）。

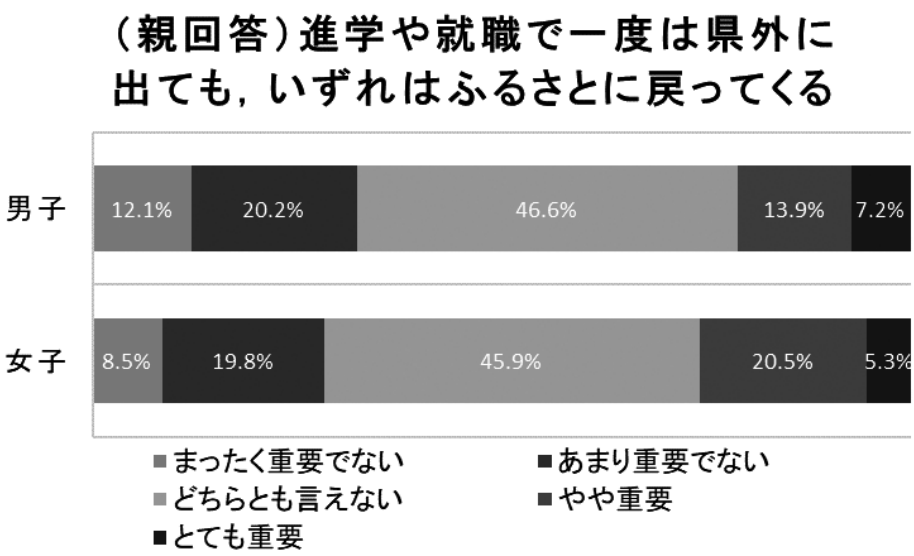

図 15

実際、親たちへのインタビュー調査でも、県外に子どもを出すところまでは親としてすることが具体的にいろいろあったのに、県外に出してからは、もうそういう具体的なやるべきリストみたいなものを持っていないという、そういう様子がうかがえました。

例えば、長女が関西の国立大学に行ったＥさん。「長女が地元に戻る可能性は低いと思います。何となく分かっていたので」と言っています。Ｂさん。子ども２人が県外の大学に行ってしまったという方ですが、子ども部屋の処分を始めているということで、「机はなかなか処分しづらいんで置いたままになってますけど、あとは少しずつ、２人の子供たちが帰ってきたときに少しずつ処分させてますね」と言っています。

Ｇさん。Ｇさんは長男長女が県外の大学を卒業して、今はもう社会人という方なのですが、出ていった子どもに関しては、「家に戻ってきてもいる場所がない」と言っています。いずれにしても、県外の大学に行くまではあれほど一生懸命あれこれ子どもに対してしてきたわけですけれども、一旦県外に出てしまうと、親としてすることが急になくなると言ったら言い過ぎですけれども、すべきことが明確でないということです。

つまり、県外の大学に進学させた時点で、親の目標、つまり、広い世界で学ばせるという目標が達成してしまうこと、つまり、ゴールになってしまうっていうことですね。そこから、親が子どもに対して何をするのか具体的なシナリオが明確にない。もちろんわが子ですから、家に帰ってきたら御飯作ってあげたり、あるいは、何か困ったことがあったら相談に乗ってあげたりとかは、親子ですから、するのだろうと思います。けれども、県外進学に向かって

頑張ってきた親としての実践に比べ、県外に一旦進学した後のシナリオは全然具体的でないのが非常に特徴的だと思います。

親であれば、親になるために「親をする」わけですね。親鳥にとって、ひなが巣立つまでに飛ぶための練習をさせるのが「親をする」ことであれば、人間だって、親として「親をする」ということが言えると思うのですね。

今回の調査の対象であった親たちにとって、「親をする」とは、広い世界を学ばせたいということで、県外の大学の進学ができるように一生懸命に準備していくことだったんじゃないかなと思います。そのために、いろいろすることがあって忙しい、それがまた親として充実した時間になるという、そういうようすが浮かび上がってきます。そして、その目標が達成したら今度は、親として次に何に頑張ったらいいのか、その具体的な目標みたいなものがない、どう「親をする」かがはっきりしていないというのも、子ども部屋を処分しているとか、もうどうせ帰ってこないからって言って話が終わってしまうところからうかがえました。

大学を出たら、もう広い世界を学ばせる必要ないかというと、そうではないはずなのですけれども、子どももも社会人だし、親にはもうすることがないということなのかもしれません。県外の大学に送り出して、その後の親のシナリオはない。出た後はほとんどノーアイデアですね。これが私たちの社会の、言ってみれば、学歴社会の子育てなのかなということを改めて思いました。

一生懸命に「親」をやるほど子どもが出て行く

いずれにしても、親たちは一生懸命親をやっているだけなのですけれども、結果的に、それが若年層の人口の県外流出を生み出している。もちろん島根の親がみんなこうだというわけではありません。冒頭でも言いましたように、今私が中山間地域でやっている調査では、また違った親の、親をすること、親の実践が見られることからも、全員がそうではないということは承知しています。ただ、今の社会は学歴社会、競争社会ですし、そして、子どものために親は一生懸命尽くすものだ、労力を惜しまずにいろんなことをしてやるものだ、という考えを強く内面化している人たちが多いわけですね。そういう中で、親たちはこうなる傾向がある、あるいは、こうさせられてしまっているということが見えてきたと思います。

私自身も、この調査を行なっていたときは子どもが小学生だったのですが、今はもう中学3年生になっていて、いよいよ高校選びという話になってきました。今回、高校卒業で子育てが終わりみたいな話を聞いて、他人事ではない感じがしています。「広い世界」「県外進学」以外に目標を置いて「親をする」というのはできないのか、これ以外の「親をする」につい

ても考えられないのかと考えさせられてしまいます。あるいは、県外の大学に行った後、親をすることについての具体的なシナリオがないということでしたけれども、もしそこに、帰ってくるというシナリオがあれば、また状況は変わってくるかもしれません。でも、そのシナリオが今のところは誰も頭に浮かんでいないし、その作成が待たれるのかなと思います。ということで、親は本当に親を、一生懸命やっているだけなのですが、それがこういう結果を招いているということを、改めてこうやって調査で具体的にたどったということです。

私の報告は以上です。ありがとうございました。（拍手）

○田中

片岡先生、ありがとうございました。

最後は、石飛憲先生、「地域に根差した県立普通高校の実践と課題」という御報告です。

石飛先生は、島根県雲南市の御出身で、島根県立横田高等学校主幹教諭、また、横田高校の魅力化推進部長です。地元の教育に一貫して尽力してこられました。

では、石飛先生、よろしくお願いします。